徳島大学皮膚科における薬疹の統計

徳島大学医学部皮膚科教室（主任：武田克之教授）

麻野誠一郎・榎本充邦・重見文雄

Statistical Survey of Patients with Drug Eruption at Department of Dermatology, Tokushima University (1963-1977)

Seiichiro ASANO, Mitsukuni ENOMOTO
and Fumio SHIGEMI

Department of Dermatology, School of Medicine, Tokushima University
Tokushima, Japan (Director: Prof. K. Takeda)

はじめに

わが国が世界の最長寿国になったことが報じられて日
も浅い。長寿国になりえた要因のひとつに医療水準の向
上があげられ、数多くの有用な薬剤の登場も大きな役割
りを果たしていると思われる。他方、薬剤の副作用があ
とをたたない現状であり、近頃の薬疹の統計的観察は一
致して薬疹患者の増加を指摘している。

このたび、われわれは昭和39年～52年の間に、徳島
大学皮膚科を受診した薬疹患者を集計し、さきの武田ら
の報告¹⁾から昭和38年の薬疹患者をくり入れて、15年
間の薬疹患者について統計的に観察したので報告する。

対象と観察方法

昭和38年1月から昭和52年12月までの15年間に、
徳島大学皮膚科を訪れた患者総数は50,452例であつた。
このうち、問診、検査、臨床症状などから薬疹と診断さ
れた927例を対象として、年次別、月別、性別、年令別
の変動を観察し、各症例の発疹型、原因薬剤についても
検討した。

発疹型の分類については種々の提案があるが、ここ
では細かい分類を避けて、固定疹型、汎発疹型、TEN (to-
xic epidermal necrolysis) 型、蕁麻疹型、光線過敏
型、痒疹型に分け、上記のいずれにも属さないものをそ
の他とした。

原因薬剤の決定は誘発試験、貼布試験などで確認した
症例もあるが、問診を重視した症例も多い。医師により
処方された薬剤については可能なかぎり直接処方内容を
照会し、原因薬剤を追求した。また、複数の薬剤が使用
され、いずれとも判定しえなかつた場合は原因薬剤不明

とした。

観 察 結 果

1. 年次別患者数：昭和38年から52年までの15年
間の薬疹患者数の年次別変動では、昭和43年にピーク
を形成し、ついで昭和50年に第2の山がある。この15
年間を便宜上、5年ごとに前・中・後期に3区分して観
察すると、昭和38年～42年の前期5年間は薬疹患者数
34例～38例で、対外来患者百分率は1.07%～1.46%の
間にあり、平均1.26%と15年間のうち発生頻度はもつ
とも低い。中期5年間では昭和43年に93例、2.91%と
急増し、昭和45年にふたたび前5年間の頻度に近づき、
大きく変動するが、平均発生頻度2.25%で最高であつ
た。後期5年間も前期より高頻度（平均1.97%）であ
つた。最近の10年間は前5年間より薬疹患者の頻度は
増加している。なお、全年度を通じて薬疹患者数と外来
患者総数にたいする百分率はほぼ平行している（第1表、
第1図）。

今回の15年間の薬疹患者数をさきの当科の15年間（昭
和24年～38年）の集計¹⁾と比較してみると、今回の症
例数は927例で、対外来患者百分率は1.84%となり、
さきの0.63%を大きく上回っている。昭和38年が重複
していることを考慮しても、最近15年間に薬疹患者の
増加がめだつ（百分率でも約3倍）。

樋口ら²⁾が過去60年間の薬疹の発生の推移に3つの
大きな波をあげ、第1波はヨード・ブロム疹時代（明治
末期）、第2波はサルバルサン疹時代（昭和12年～17
年）、第3波は昭和36年以降の多種類の薬剤による薬疹
時代であるとし、「ここしばらくは下降線をたどること
はあるまい」と述べているが、その予言が10年以上を

第1図 年度別薬疹患者数およびその頻度

第1表 年次別薬疹患者数

年	外来患者 総 数	薬 疹 患 者 数			(%)	
		男	女	計		
38	3378	12	24	36	1.07	平均 1.26
39	3281	21	27	48	1.46	
40	3042	15	19	34	1.12	
41	3176	24	16	40	1.26	
42	3233	22	23	45	1.39	
43	3197	41	52	93	2.91	平均 2.25
44	2901	31	50	81	2.79	
45	3102	22	30	52	1.68	
46	3441	27	45	72	2.09	
47	3750	30	42	72	1.92	
48	3606	21	38	59	1.64	平均 1.97
49	3665	29	39	68	1.86	
50	3755	38	50	88	2.34	
51	3514	26	37	63	1.79	
52	3411	35	41	76	2.23	
計	50452	394	533	927	平均	1.84

経た今日でもくつがえされていない。

2. 初診月別患者数：15年間の薬疹患者の発生を初診月別に比較すると、7月が115例ともつとも多く、11月が43例でもつとも少なかった。10月～12月に薬疹患者数が少ない傾向にあるのは、諸家の報告²⁾⁴⁾とも一致するが、その要因は明らかでない（第2図）。

3. 性別：薬疹患者の性別は、男394例、女533例で、男女比が1：1.35と女に多く（第1表）、諸家の報告²⁾⁴⁾⁹⁾とことなる。しかし、外来患者の性差も、男21,119例、女29,333例、男女比1：1.39と女が多く、発生頻度でみれば、男1.87%、女1.82%となり、ほとんど差はないといえよう。

4. 年令：15年間（昭和38年～52年）の薬疹患者の年令分布は20才代が197例、30才代が192例と20才～40才に好発し全体の約4割を占める（第2表、第3図）。この15年間で5年ごとに3区分すると、前期（昭和38

第2図 初診月別薬疹患者数

第2表 薬疹の年令別患者数

年令	0～10	11～20	21～30	31～40	41～50	51～60	61～70	71～
38	0	2	7	12	7	5	2	1
39	5	5	8	18	6	5	1	0
40	4	6	7	10	5	1	1	0
41	2	6	12	10	4	4	1	1
42	4	6	8	7	10	5	4	1
43	6	9	23	24	15	6	7	3
44	7	17	21	18	7	8	0	3
45	5	6	9	11	12	3	6	0
46	5	4	20	17	8	4	11	3
47	7	10	13	13	10	10	7	2
48	6	7	9	10	5	10	10	2
49	8	7	12	11	13	9	5	3
50	13	9	20	11	10	12	6	7
51	2	7	15	12	7	8	7	5
52	3	9	13	8	12	17	7	7
計	77	110	197	192	131	107	75	38
男	34	41	81	78	52	42	40	26
女	43	69	116	114	79	65	35	12

年～42年）は30才代が57例ともつとも頻度が高いが、中期（昭和43年～47年）および後期（昭和48年～52年）は20才代にそれぞれ86例、69例と頻発している。また、前期は30才代をピークとする急峻なピラミッド型であるのに比し、中期は20才代、30才代がピークをつくり、後期ではピークが20才代に移行するとともに、ひろく各年令層に患者が分布して差がなくなっている（第4図）。これは50才以上の高年令層における薬疹患者数の増加にほかならず、この傾向は樋口ら⁹⁾、北村ら¹⁰⁾の報告と一致する。今後、高令者人口の増加とともに、この傾向は強まり、薬疹患者が各年令層にわたって増加することを予想させる。

第3図 薬疹の年齢別患者数

5. 発疹型: 薬剤による皮膚の反応形式は多種多様であるから薬疹の発疹型はきわめて多彩であるが, 全身に汎発するものの多くはアレルギー性の発症機転をとり, いわゆる反応性皮膚疾患として一括される⁷⁾。そこで,

第3表 薬疹の発疹型別患者数

型別 年	固定 疹型	汎発 疹型	TEN	蕁 麻疹 型	光 過 敏 型	線 過 敏 型	痤 瘡 型	その型
38	12	13	0	1	4		2	4
39	20	13	1	0	0		7	7
40	13	12	0	0	0		8	1
41	15	11	0	3	0		8	3
42	12	18	0	1	0		5	9
43	22	44	0	1	2		9	15
44	13	36	1	2	1		15	13
45	13	23	1	1	0		7	7
46	14	32	0	3	2		4	17
47	8	41	1	3	1		14	4
48	9	26	1	0	3		3	17
49	11	40	0	3	1		4	9
50	12	44	0	5	7		14	6
51	7	34	0	4	2		6	10
52	6	40	0	2	1		14	13
計	187	427	5	29	24		120	135

発疹型別に頻度をみると, 汎発疹型が427例で, 2位の固定疹型187例をはるかに上回っており, とくに昭和43年以降この傾向がめだち, 北村ら⁸⁾の報告も同様の傾向を指摘している。ついで痤瘡型, 蕁麻疹型, 光線過敏型などの順で続くが, その他に属する症例も増えてきている。最近の薬疹の発疹型はますます多様化の傾向にあることをうかがわせる(第3表)。

6. 原因薬剤: 徳島大学皮膚科における最近15年間の薬疹患者を原因薬剤別に分けると, 解熱鎮痛剤が163例でもっとも多く, ついで抗生物質147例, 以下ステロイド剤85例, 感冒薬69例, 精神病薬53例, 抗結核剤29例, 降圧剤24例, サルファ剤13例の順に続く。年

第4図 薬疹の年齢別患者数

第4表 薬疹の原因薬剤別患者数

年	原因薬剤	抗生物質	サルファ剤	抗結核剤	解熱鎮痛剤	感冒薬	降圧剤	精神病薬	ステロイド	その他	不明	計
38		2	0	0	12	1	5	1	2	3	10	36
39		0	1	2	18	3	0	0	3	6	15	48
40		0	2	0	10	3	0	0	7	2	10	34
41		1	1	2	6	6	0	1	8	3	12	40
42		3	1	2	13	2	1	5	4	2	12	45
43		11	1	1	17	6	1	5	6	6	39	93
44		10	4	2	8	6	1	6	10	7	27	81
45		7	0	2	11	9	0	3	6	0	14	52
46		19	0	3	17	1	1	5	2	6	18	72
47		27	0	3	18	2	0	3	9	6	14	72
48		8	1	1	5	6	4	5	3	5	21	59
49		16	0	4	10	6	1	4	0	9	18	68
50		15	2	1	14	9	5	6	13	3	20	88
51		16	0	1	9	6	3	3	5	8	12	63
52		12	0	5	5	3	2	6	7	8	28	76
計		147	13	29	163	69	24	53	85	74	270	927

次別ではあいつぐ抗生物質の開発とその使用頻度の増加につれて抗生物質を原因薬剤とする薬疹患者が増加傾向にあるのは当然と思われるが、ほかに、精神病薬が昭和43年ころより、降圧剤が昭和48年ころよりかなり増えていることが注目される(第4表)。

ま と め

1) 昭和38年から52年までの15年間に徳島大学皮膚科を受診した薬疹患者数は927例で外来患者数50,452例にたいする百分率は1.84%であつた。

2) 初診月別に薬疹患者数をみると、7月をピークに1月から9月にかけて多く、10月から12月に少ない。

3) 薬疹患者を年齢別にわけると、20才代がもっとも多く、20才から40才が約4割を占めるが、近年、高年齢層での増加がめだち、各年齢層間の差は減少している。

4) 発疹型では汎発疹型が多く、固定疹型をはるかに上回っている。また、発疹の多様化傾向をうかがわせる。

る。

5) 原因薬剤では解熱鎮痛剤と抗生物質が多く、近年、精神病薬と降圧剤による薬疹の増加が注目される。

(稿を終るにあたり、御指導、御校閲をいただいた武田克之教授に感謝いたします。)

文 献

- 1) 武田克之・他：皮と泌，**26**：789，1964.
- 2) 樋口謙太郎・他：皮と泌，**28**：29，1966.
- 3) 小嶋理一・儀保之彦：皮膚臨床，**10**：449，1965.
- 4) 安田利顕・露木重明：皮膚臨床，**12**：612，1970.
- 5) 溝口周策：皮膚臨床，**9**：99，1967.
- 6) 北村則子・他：皮膚臨床，**19**：1037，1977.
- 7) 武田克之：日本医師会医学講座，昭和46年度，金原出版，1973，p. 263.

(昭和53年7月18日 受付・特掲)

別刷請求先：〒770 徳島市蔵本町3-18-15
徳島大学医学部皮膚科教室
麻野誠一郎